



サイマさん (左)

異文化経験二題

サイマ・アフザル

日本も私の国パキスタンと同様アジアの国であるから暮らして異文化体験はそう多くはなかった。むしろ文化的な親近感を覚えたことのほうが多かった。といって衝撃がなかったというわけではない。しかし、その深刻な問題もまわりの日本人の名だたる親切心といつもの礼儀正しさによって大いに緩和されたものだ。最初の衝撃は開発スクールの始業式のパーティーで私を待ち構えていた。食事の習慣にはその国の文化が大きく表れる。パーティーの席でも自分の食の規律に触れない

よう、取るものには細心の注意が必要だ。私の場合、ノンハラル肉が使われていることを恐れ、野菜サラダと果物だけを選んで食べた。グリーンサ

ラダばかり探すことまるで牛のようだった。そんななかに色とりどりに並べられたパンの皿に目がとまった。二つ自分の皿に取り、そして口に入れた。下に敷いてあったのが炊いたコメであったことに気づき少し驚いた。子どものときに日本にはライスケーキというのがあると聞いたが今、口に入れたのはライスケーキなのだろうと思つた。だが甘さは感じられなかったし、ケーキらしからぬおかしな味がした。そばにいた日本人にこれはいつたい何か、とたずねた。「さしみ」だという。それでもわからないとみてか「さしみ」とはなにかを説明してくれた。「生魚」の言葉にあやうく皿を落としそうになり、胃に送り込んだものをはき出しそうになった。のどは本能的な反応をなんとかくいとめてはくれたが……。今私はさしみを単に食べるだけでなく賞味することができると一種の自信をもって言うことができる。

第二の衝撃はイオンの一階のお店で買い物していたときに襲った。それは小さな雑貨を集めて売っているしゃれた店だった。そのときは友人の娘さんの誕生日祝いにと子供服を探していたのだ。おもてから見ると幼児用の服とかおもちゃを並べているようだ。だがよくよく見ると犬のための雑貨を扱う店だった。南アジアでは文化的に犬は人間とはある距離をおいて飼われる。犬に服を着せたりアクセサリーをつけるということは問題外なのである。日本での生活も半年になるが今でも服を着て飼い主に引か

れる犬(犬が飼い主を引っ張っている場合もあるが)に出くわしても噛みつかれるのではという恐怖で端に飛び退いてしまう。パキスタンでは多くの犬は宿なしで家庭で飼い慣らされてはいない。人なつこくもないし、狂暴である。空腹時は通行人に危害を加えることも多い。日本で神社やお寺を訪れたとき、参拝者が犬を引きながら拝殿で手を合わせている光景に出会ったことがある。これは大変な驚愕であった。南アジアではムスリムでもヒンドゥでも祈りの場所に犬を連れ込むのは神聖さ、規律の冒瀆でありその場の参拝者の怒りと暴力を呼びおこしかねないことなのである。しかし、そのときこう思い返したものだ。「ペットの犬にも神や仏のご加護が与えられますようにと連れて来られたわけか……」

文化的衝撃の話はこれだけではない。衝撃中の衝撃といえるものは日本の友人と温泉に行ったときに待ち受けていた。自分一人で温泉に行くなどと言うことは夢にも思わないから連れて行かれたというほうが適当だろう。温泉の風景は、百聞は一見に如かず、Wink winkだ。なにを書いてても実物にはかなわないので語るのはやめておく。その他、いろいろあったが私の日本滞在は日本の友人の手助けと心の温かさのお陰をもって大変楽しいものであった。ユニークなのはさしみだけではない。この日本人の親切も日本以外ではけっして見ることができないものである。



Ms. Saima Afzal / アジア経済研究所開発スクール第19期海外研修生

出身地：パキスタン
Deputy District Officer
Establishment Division
Punjab Government (パンジャブ州政府)